

## 『北越雪譜』の挿絵

高橋 実

### 挿絵の持つ意味

北越雪譜には初編三十一図 二編二十四図、合計五十五図の挿絵が載っている。北越雪譜のような本で挿絵はどのような意味を持つものであろうか。京山は書簡の中で牧之に次のように教えている。引用の文献は『鈴木牧之全集 下巻』中の「山東京山書簡集」「滝沢馬琴書簡集」による。また「校註本」は『校註北越雪譜』（野島出版）による。

○北斎漫画はめつらしき図をあつめたるかゆゑに、絵でうれ申候。これをおもへば三都にみなれざる雪のふりはじめより、雪の支度いたす図、はじめて雪の降る所より少しくつもりたる所、その内へ雪中のはきものさまさま図をいだし、これハかくするもの、これはかやうかやうとそのもちふる所のわけをしるし、雪ばかりの図に、さまざま三都の人のめづらしくおもふ事もあるべし。熊取の所など、さぞかしおもしろき図とおもはれ申候。玉山曲翁などへ被遣候御下書もあるべし。熊取なればそのしハざを見るがごとく、児女にもわかるやうにしるし、かな付にいたし、図を見てしるゝ所ハ、図の上へ、何々の図とばかりいたし、越の大雪を、目前に見るがごとくいたし候ハバ、たしかにうれ可申存候。一冊に図を十二三枚にいたし、よむ所は五六丁にもいたし、二冊ものにて初編といたし、出板いたし候方可然哉。（鈴木牧之全集下巻 279頁下）

○こゝに論あり。翁よミ本を御覧の時、まづ絵を見てのちに本文をよむべし。画組おもしろからざれば人のくひ付もあしし。雪志ハ江戸中のかし本屋のふろしきに入るもの也。かし本をかりてよむ人ハ、ことさら画のおもしろきをまづかりて見る也。さて又たとへば、文句に「闇夜にして咫尺もわかたず」とあるゆゑに、真黒な中に人物ばかりかゝれもすまじ。画ハ文の外を見するもの也。（同書 325頁）

画というものは読む人の導入部分を担当し、まず絵を見て、これはおもしろそうだと文を見るのだと教えている。画は「文の外を見するもの」というのである。いかに京山はこの挿絵に力を入れていたかがうかがわれる。「越の大雪を、目前に見るがごとくいたし候ハバ、たしかにうれ可申存候。」現代でいえば、挿絵は写真のように存在感・迫力あるものであったのであろう。

### 京山の挿絵観

○私存寄二ては、読本の形にいたし、雪の図なれば、うすゞみの彩色を入れたる所もあり度、彩色本国禁なれども薄墨は制外なり 又人物を見せたる所、細画の所いろ／＼取りませ、目をかへらせたし。北斎の筆ならば上々、次には英泉なるべし。国貞などの筆のものでハなし、唐画家にかゝせ、候てハ、俗におち不申、うりものにハあしく候。上梓のうりものハ、文晁でもあしく候。先年亡兄方へ被遣候御草稿の時よりハ、はゞかりながら御

画も御進み、雪の事は、段々くわしくならせられ候事と存候まゝ、この節又々草稿被成候ハハ、目を驚し申事と存候。(280頁上)

○元来ハ曲翁の申すことく、作者が其実景をみざれば筆もとりがたく、作者が実景をみればおもしろき図も、おもはぬ所にあるべく存候。ここが何事にも黒人と素人とのわかちにて所謂餅やの餅かと存候。(280頁上)

挿絵は餅屋の餅で専門家に任せるべきだというのである。

### 挿絵作者京水

この絵は京山の息子京水が描いている。はじめは国直が書く予定であったようだ。ところが、国貞は他の仕事も抱えていて、十分時間がとれそうもないようだった。

○国直画ハいまだ出来かね居り申候。上の巻ハ筆耕校合等も相すみ、余分割刷にかゝり居申候。とても当年中に、全部の彫刻ハとゞのひかね可申よし、版元も申候。国直画の所いまだ出来かね申候事ハ画を以て口を糊し候ゆゑ、いろく取かかり居、かれ是にていまだ出来かね候との事二候。(340頁下)

こうした事情で、挿絵は国直から息子京水に乗り換えた。京山は牧之宛の書簡で次のように述べている。

○丁子屋の好ミにて、雪譜の全部を京水一筆の画にいたしたし。此のゆゑに国直へもさいそくせず、国直も又筆せわしく、私に前借りの借金も在るゆゑに、かいても錢に遠きゆゑ、づるけをするならんといへり。依而京水に全部かゝすれハ国直に用なし。しかれども雪譜を丁子屋へよめ(と)らせたる媒ハ国直也。(352頁上)

この本の出版を丁子屋との橋渡しをしたのが、国直だった。国直はネットでは歌川豊国の門人で、為永春水、山東京山の合巻本の挿絵を担当したとある。京山の息子京水はネットでは、文化十三年(1816)生まれ。慶応三年(1867)没、江戸時代後期の画家。父京山の「熱海温泉図彙」「北越雪譜」の挿絵を担当したと載っている。

北越雪譜の序に画者京水は次のように言っている。

○此の書の稿本、図は別冊とし、或は其説に大図を描して添たるもあり。皆牧之翁が自筆の草画也。此挙梓行の為にせざれば図に洪纖重復あり。今梓に臨て其図の過半を省き目を新にするものを存して巻中に夾刺するは単冊に尽し難を以て也。斯は是刪定の意に係る所也。余嘗て原図を閲するに、雪中の諸状混錯を走墨に失して通曉し難きもの靴中の瘡痒これを何如せん。唯翁が草図に倣ひて真に描せる而已。或原図の梓に入るものは則これを加ふ。或は説有て図無きもの其説に拠て其図を作りしもあり。蓋余未だ越地を踏ず、越雪の真景に於て茫然たり。故に雪図に於て違漏あるも知るべからず、其誤を編者に驅ること勿れ

京山男少年

乙未秋

京水百鶴(校註本 3頁)

牧之から送られてきた挿絵は本文とは別冊で、すべて牧之の原画であった。そこには洪纖(こうせん) 大きいものと小さいもの(重複があった。大小似たものが混雑していた。

そのまま本の中に載せられず、京水の書き直しが必要だった。しかし、このころ京水は越後の大雪の実景を見ていなかった。こういう絵があったらと思うものは牧之の原文によって想像しながら挿絵を書き加えたものもあった。おそらく間違いもあるだろうその誤りをして牧之を責めないでほしいというのである。

○貴翁御学才もあり並に御画も見事なるゆゑ、雪図雪話共に自在を得て見るにおもしろく候へども、著述の文法手段に御馴れ不被成候へゆゑ、上梓すべき桜木の花の影が、日むきの障子にうつりたるを門より見るが如し。是を種本として書に作るハ、桜の影を見て、其桜を極彩色にするが如し。されば、私が心のまゝに下絵をつけて、極彩色にすると筆の労は相同じく、下絵の在るものを書くまでの事也。(316頁下)

一方、京山は牧之の挿絵にも不満があった。京山がここで述べているように、挿絵の技法に熟練していた京水には、実景色を見ていないという欠点があったし、実景は知っていてもそれを読者がみても原画は鑑賞に堪えられるには不十分な絵だった。つまりは両者の融合があつて始めて読本の挿絵として読者に受け入れられるというのである

また二編の序に京山は再び次のように述べる。

○巻中の画、老人が稿本の草画を真にし、或いは京水が越地に写し真景、或は里人の話を聞いて図に作りたるもあり。其地に照して誤を責ることなかれ(校註本 153頁)

以下それぞれの挿絵を一覧表にしてみた。それぞれについて中に書かれている漢詩や和歌・俳句そして京山・馬琴の感想・筆者の感想を述べてみたい。

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
挿絵タイトル	掘除積雪之図 つもらりたるゆきをせじりのくゆす	屋上雪掘図 やねのゆきほるす	縫を穿きて雪 すがりをはききてゆき 行図 ゆきにて	雪中歩行用具 せつちゆうほかのようぐ	驗微鏡を以て むしめがねをもつ 雪状を審に視 ゆきのかたちをまびらかにみ たる図 づ	雪中積雪之図 せつちゆうちゆうゆきのつもらりたる	雪中洪水之図 せつちゆうちゆうすゐのづ	老農語往事図 らうのらむかしをかたるづ	熊助樵夫之図 くますけしやうたすくぬづ	雪蛆の図 せつじよづ
校註本	4頁	5頁	5頁	5頁	10頁	18頁	24頁	32頁	33頁	38頁
木版本	叙	叙	叙	叙	初編上	初編上	初編上	初編上	初編上	初編上
署名	京水筆			京水筆			京水筆	京水	牧之筆	
挿絵文中説明				わらはばき・わらくつ・しづからみ・わらばうし・紙ぼうし・わたいればうし・みの・こしき・すき・わらばうし・むねかけ・ぼろぼうし・すがり・かんじき・別のわらくつ	此図は雪花図説の高撰中に在る所五十五品の内を騰写す。是即ち江戸の雪也。万里をへだてたる紅毛の雪もこれに同じき物ある事高撰中に詳也。以て天の無量なるを知るべし 世に雪輪といふは是なり	人家の雪を掘る事本文にいへるがごとし・雪を掘る事洞のごとくになし、棚も台もみな雪にて作り物を売る。これをさつやといふ。③図中山の如くなる所皆雪なり。人家 さつや				此虫夜中は雪中に凍死たるがごとく、日光を得ればたちまち自在をなす。又奇とすべし。色蒼し

26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	番号
鮭漁打切の図	絶壁搔網の図	鮭漁箝突の図	鮭の縮図	渋海川奇蝶之図	雪ノ堂の図	裏に入りて寝の図	同猿飛橋の図	秋山絶壁の図	花水祝浴水略図	雪中晒縮図	発狂の図	鶏図 農夫頓智借	上往来の図 三國嶺雪顔の	農人夫婦逢雪吹図	雪中捕熊図	挿絵タイトル
117頁	116頁	115頁	115頁	108頁	95頁	95頁	94頁	94頁	80頁	72頁	66頁	56頁	48頁	43頁	42頁	校註本
初編下	初編下	初編下	初編下	初編下	初編中	初編中	初編中	初編中	初編中	初編中	初編中	初編上	初編上	初編上	初編上	木版本
牧之画		京水筆				京水画	牧之画		鈴木牧之画		京水筆	京水筆	京水筆	京水筆	京水筆	署名
			○鮭 大なるもの三尺四五寸、小は二尺四五寸 鮭の大き図の如し 魚揆の図 鮭の全図					わらはばき・わらくつ・くつ	堀の内駅花水祝ひ噪劇の図。原本の草画を此に載せて別に至細を示さざるものは、梓刻の勞を省くに在り	此所すべて皆雪の上也。○医師雪舟にのりて病家へゆく	娘のかくし男		なだれのうへをゆきます			

42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	番号
(亀の化石)	芭蕉翁訪凍雲	浦佐詣堂押図	六月売雪図	轉全図	積雪の図 大持の学をして遊ぶ 図 駅中の正月	(すがりで歩行の図)	(雪中歩行の具)	雪中演場を造図	塚山峠雪吹図	駅中の正月積雪の図	雪窓座頭を降す図	雪中幽霊之図	笈掛岩大氷柱図	寒行者威徳之図	初編下 鮭洲を走る図	挿絵タイトル
214頁	206頁	192頁	188頁	180頁	180頁	177頁	175頁	170頁	164頁	160頁	142頁	134頁	126頁	126頁	117頁	校註本
二編一	二編一	二編一	二編一	二編一	二編一	二編一	二編一	二編一	二編一	二編一	初編下	初編下			初編下	木版本
					秋月庵 牧之筆										京水畢	署名
蟹の化石 腹の図 厚 二寸六分 重 八百目	甲之図 堅 曲尺五寸五分 横四寸五分	春の梢雪の消えたるのち再び雪の降たる 景・毘沙門堂・つららをせおふ		形大小定尺なし 戴物に随て造る 木材 は堅木を用ふ	時は春なり つらゝ		藁沓 深沓 ハツハキ むねあて からみ かじき 前 すがり	此地上皆雪なり 雪 寺	○風雪のうづをまく	地上皆雪なり 雪						挿絵文中説明 挿絵文中もじ

番号	挿絵タイトル	校註本	木版本	署名	挿絵文中説明 挿絵文中もじ
3	牧之、村山藤右衛門の亀の化石を見る	215頁	二編一	牧之筆	
4	剛夫得名玉図	222頁	二編一		
5	斎神祭事之図	228頁	二編一		
6	雪中狼入人家図	236頁	二編一	京水図	
7	正月鳥追櫓之図	248頁	二編二		図中山をなす所、皆雪なり
8	北高和尚勇氣図	256頁	二編二		
9	七ツ釜之図	268頁	二編二		
0	山中異獣の図	276頁	二編四	秋月庵牧之	
1	弘智法印枯骸之図	280頁	二編四	牧之写	
2	登苗場山之図	288頁	二編四	秋月庵牧之 年七十二筆	秋山村々・秋山 信州千曲川 黒ヒメ サド
3	娥眉山下橋柱	290頁	二編四		宿図左のごとし。文一丈五寸余。木質弁名べからず
4	市中四月雪解図	294頁	二編四		
5	阪額野陣之図	298頁	二編四		長の太郎讒に遭ひ、鎌倉より討手来りしに阪女大将として遠くいて軍に勝ちて野陣を張りたる事は本文には本文にあり。文おふければ今省つ。ここに一図をのこして児曹の観るに供す。けだし、軍器の時代は棄てて訂さず。

(挿絵中の漢詩や俳句・和歌の読み方を試みたが、漢文は難解で歯が立たなかった。ここに未読の部  分として、そのまま載せて識者の高見を請いたい。なお書き下し文の読みには、見附の山谷ヤス子氏のお力をお借りした。お礼申し上げたい。(上のNo.は挿絵No.を指す)

## 1番

枕間簌々雪華飛	枕間簌々雪華飛び
天曙望来白四围	天曙望み来れば四围を白みたり
烟絶樵林人不見	烟絶え樵林に人見えず
風凄獵径犬空飢	風凄く獵径に犬空しく飢ゆ
瀬乗冷艶促高履	瀬に乗る冷艶は高履を促し
屢拂寒光集蔽衣	屢寒光を払ふて弊衣を集むれど
屋裡要知春色到	屋裡要らず春色の到るを知る
墻頭三月早梅緋	墻頭三月早梅緋し
右賦北越雪景	

江戸 醉石山人 禄題

註

簌々 ソクソク はらはらと落ちる様屢  
ル しばしば

**京山コメント** 雪を鋸にて引きわり申候所の図などハ、大きくみせたし。めづらしき事二候。市中のありさまと山中のありさまと、雪中鳥をとる事、漁獵山獵の図もおもしろかるべし。(280頁下)

## 筆者の感想

コスキを使って掘る人物。鋸で雪を切断する人。固い雪と柔らかい雪を除雪する方法を同時に描いて居る。雪を知らない京水の図からくる誤りか雪国の除雪を良く知らないことから起こったミスか。屋根に積もる雪を鋸で切り出すなど雪国では考えられない。鋸や鳶口を使うなどは春先雪が石のように固まったときに使う

## 5番

天機兀々百花中	天機兀々たり百花の中
六出奇葩别示工	六出の奇葩は別示の工
詳雪尊篇窮理冊	雪を詳に尊篇窮理の冊
兹袖珍図辱高風	茲に珍図を抽んじ、高風を辱しめん
題雪華図	牧之

註

兀兀 ゴツゴツ 高く突き出た  
窮理 物事の性情変化の理を推し極めること



6番

埋家丈雪幾季年 家を埋める丈雪幾季年

慣習寒光不恨天 慣習し寒光に天を恨まず

梅柳未春三月尽 梅柳未だ春三月尽きざれば

六華在朶代清妍 六花朵に在りて清妍に代ふ

鈴木牧之題

註 朶 枝

筆者感想 雪の山を豆腐のお化けのように描いている。松の木は京水の蛇足か。

13番

玉屑團成三國峯 玉屑團成す三國の峯

寒光透骨難移筇 寒光骨を透して筇移り難し

何人寵雪双花月 何人ぞ雪に籠みて花月を双べん

棧径凌雲蹈白龍 棧径雲浅く白龍を蹈む

京山人題

筆者感想 雪の山を豆腐のお化けのように描いている。松の木は京水の蛇足か。

京山コメント「余越遊の時三國嶺を躡しに此峠はさらなり、前後の連岳すべて松を見ず。

此地にかぎらず越後は松の少き国なり。三國嶺を知る人は松を画しを笑ふべし。

是老人が本編の誤にあらず、京水が蛇足なり。」二編京山凡例（校註本 15

2頁）

14番

筆者感想 雪崩の季節庭先には雪がなく、筵で干し物をしている。京水が雪の情景を見

ないで書いたものと思われる。庭先にござを敷いて穀物を干しているが、雪

国の冬には考えられない。女が下駄を履いているが、この頃の履物としては

考えられない。

15番

京山コメント 御機屋靈威狂女之図の所をがせの図の事承知仕候。（328頁上）

17番

梅にきて花むこかほや鶯も水を祝ひし堀之内庭

山東庵 京山

22番

馬琴コメント 野槌并ニ彼水上にむれとぶ蝶やうの虫等、追々くハしく生うつしニ被成

被遣被下候様奉願候。（199頁上）

30番

京山コメント 寒念仏の幽霊など雪中の事にして、雪外の奇観差しみるにも相成申候事。雪中

の幽霊の髪を剃る所など絵組にハよろしく、あけてもくく雪の図ばかりでハ、

目さきもかハラず。(319頁上)

### 38番

そり哥も嬉し梅待つ春もやゝ

北越小千谷 岩居

### 41番、

凍雲をたづねて

葉欄にいづれの花を艸枕

はせを

### 47番

新年都未芳華華 新年都未だ華華芳しからず

一月初驚見草芽 一月初めて草芽を驚き見る

白雪却嫌春色暁 白雪却て嫌ふ春色の暁

故穿庭樹作飛花 友庭樹を穿ちて飛花を作す

涼仙書百樹

### 53番

霄間清露湿衣中 霽間の清露は湿衣の中

無際平蕪四望新 際無き平蕪は四望新なり

呼吸極知通帝座 呼吸極みて帝座に通ずるを知るに

徘徊却愧問天人 徘徊却って愧ず天人に問はん

吐息も雲とやならむ峯の秋

秋月庵牧之

### おわりに

五十四枚の北越雪譜の挿絵について解説を試みた。あけてもあけても雪の図ばかりでは読者が退屈してしまうという京山や馬琴の忠告に対して牧之は富士山の百図（安藤広重富士百景を指すものか）をもって反論した文書があったと記憶しているが、書簡の中から見つからなかった。牧之は江戸の識者に唯々諾々と従ったわけではなかった。

なんといっても図中の漢詩には困惑した。崩し字を読めず、漢語の意味の分からない箇所も出ていて、どこで切るのか分からなかった。このような読解不能や誤読のまま原稿として載せるのは恥ずかしいが、いつか誰かが試みなくてはならない。願わくは識者の知恵を貸してくださることを期待して校了としたい。